若葉祭（うなごうじ祭）４月９・１０日

豊川市牛久保八幡社の祭である。

牛久保には家康の家臣となった牧野家の城があり、牧野成時の句「きのうけふ　若葉なりしか杉の森」から若葉祭と呼ぶが、祭人が酒に酔い道に寝転んだ様を演じ、それが蛆虫に似ているところから名づけられた「うなごうじ祭」と呼ぶほうがユーモラスでいい。

祭を見学する際、半日やそこらでその祭の全貌を知ることは不可能に近いが、祭関係者に知り合いがいると理解度が一段と深まる。地域の祭人達の話にはおらが祭に対する思いがこもるので、文献や資料からは伝わってこない無形文化を吸収できる。

牛久保八幡社の氏子総代長を務める夏目一正さんは祭仲間の友人である。夏目さんは郷土愛あふれる世話人でもあるので、自宅に大勢の客を招きワイワイガヤガヤ酒宴を催し、雑談の中から牛久保の歴史や誇りのようなものを嗅ぎ獲ることができた。こういうコミュニケーションが祭の効用であり、地域共同体の維持には欠かせない。食事後八幡社前の広場に移り祭人達の前での挨拶は豊川市長と大学関係者としての私だけで国会議員はなかったのは、祭と政治の塩梅に配慮したのであろう。私も地元の祭で政治関係者には挨拶を遠慮してもらう。祭は本来が神事であるから政治家という世俗の典型との関係は水の如き淡いのがいいと思う。

うなごうじ祭は愛知県無形文化財に指定されているが対外的にはあまりメジャーではないと夏目さんは言う。しかし、行政の決めた基準で文化財の指定を受けブランド化し、ポピュリズムを呼んでも、また時が過ぎると新しいもの好きの観光客は去っていく例はよくある故、流行という概念は一歩間違うと軽薄につながる罠である。

このうなごうじ祭ほど多彩で何でもあり、伝統の礼節も感じるが一転猥雑でもあり、楽しさ満載の祭を見たのは初めてだった。

３０キロの重量があると聞いたが、纏のような大きなダシを若い衆が担ぎ関係町内を「渡り」といって紋付き羽織袴姿で挨拶に回る。一転、ヤンキー風情の青年たちが路上で激しくダンスする「にわか」が爆竹花火とともに始まり、「笹踊り」と呼ばれる江戸時代の朝鮮通信使の装束の踊りが異彩を放つ。

１０人前後の集団が突如道路にひっくり返って寝てしまう、祭の名になった「うなごうじ」が全面展開される。

神社前広場に据えられた３台の大山車の上で、これが一番驚嘆したが、子供がからくり人形のごとき機械的、直線的な俊敏さで笹踊りを舞う頃が祭のクライマックスであろう。

同時に路上に並ぶ曳山では独特の撥さばきの小太鼓・大太鼓・笛のお囃子で子供たちの巫女舞がいやがうえに感情を高ぶらせる。

過日行った牛久保八幡社は極めて平凡な閑散とした神社であったが、この夜は銀座の歌舞伎座にも勝る劇的な舞台に変身していた。

写真:デン真